

# 東京専門学校の創立と「学問の独立」

大日方 純 夫

## 一 早稲田大学史と大隈・小野研究

二〇一六年度、『早稲田大学百五十年史』編纂の本格化や、諸事業の展開によって、早稲田大学の歴史に関する新事実・新資料の発掘・確認が大いに進展した。また、「早稲田大学大学史セミナー」の開催などによって、大学史に関する知見を大いに広め、深めることができた。本誌には、それらの豊かな成果の一端が集約されている。

ところで、三年前（二〇一四年）のこの巻頭文で、私はつぎのように記した（第四五巻掲載）。

この講座を通じてあらためて痛感したのは、早稲田側には、学生が手にして学びうる手頃な本、紹介すべき参考文献がほとんどないという嘆かわしい事態である。新島の論集や自伝は岩波文庫となっている。もちろん、慶応義塾の福沢諭吉は、自伝や著作・論集が岩波文庫などに収められているし、手にし得る多数の出版物がある。し

かし、大隈重信・小野梓らの事績や言説を、学生らがつぶさに、あるいは系統的に学ぶよすがは、極めて少ない。それは、二〇一三年夏、同志社大学と早稲田大学の連携講座として、オープン教育センターが開設した夏季科目「同志社と早稲田を結ぶ―大隈重信と新島襄・八重夫妻」を担当した際に強く感じたことであつた。

しかし、昨年三月、岩波文庫の一冊として、『大隈重信演説談話集』が刊行された。これは、二〇一四年一二月、岩波書店側から大隈重信に関する文献の文庫本化の打診があつて、まず、大隈の演説談話をおさめた文庫本をつくることを打ち合わせたことを発端としている。企画・構成は私が担当し、それにもとづいて早稲田大学編として刊行することが理事会で決定された。また、新記念会堂の建設工事のため、合同卒業式ができなくなる約三年間、早稲田大学校友会の全面的な協力により、全学部の卒業生に卒業記念として配付されることになつた。

刊行事業は、鎌田薫総長を委員長とし、文化推進担当の李成市理事、十重田裕一文化推進部長と私によつて構成される『大隈重信演説談話集』刊行委員会のもとで推進された。大学史資料センターでは、二〇一五年三月、ちょうど一一年間にわたつて編集・刊行してきた『大隈重信関係文書』全一一巻が完結した。そこで、実際の『大隈重信演説談話集』の編集作業は、『大隈重信関係文書』の編集にあつたスタッフの高橋央・星原大輔両氏の参加を得てすすめた。こうして、二〇一六年三月、『大隈重信演説談話集』は完成をみて、岩波書店から岩波文庫として一般に刊行市販されるとともに、全卒業生にプレゼントされたのである。

なお、この文庫本刊行をうけて、二〇一六年五月、佐賀市大隈記念館主催の大隈祭で、私は「大隈重信は何を語つたか―最新刊『大隈重信演説談話集』を読む」と題して講演した（講演録は本誌に掲載）。

一方、二〇一六年一月は小野梓が世を去つて一三〇年目にあつてゐた。それは、小野が開設した東洋館書店を継承した書店・出版社、富山房の創業一三〇周年にもあたる。私は、二〇一四年一二月、富山房インターナショナルか

ら、小野梓に関する書物を創業一三〇周年記念出版にしたいとの執筆依頼をいただいた。その結果、なんとか富山房創業の日、三月一日に間に合って、『小野梓 未完のプロジェクト』を刊行することができた。

こうして二〇一六年三月、ともかくも大隈と小野に関する二つの書籍が日の目をみることになったのである。

なお、二〇一五年九月には、大隈記念室の展示資料を基本とし、これに新資料を加えた『図録 大隈重信の軌跡』を本資料センターから刊行した。また、『大隈重信関係文書』の完成をうけて、本誌前巻(第四七巻)には、編纂の成果と意義に関する論文を掲載し、本巻には完成記念シンポジウムの報告を掲載した。大隈研究の進展を期すべき条件と気運が生まれてきていることを確認しておきたい。

## 二 二種類の小野梓開校演説

私は昨年発行の本誌前巻で、早稲田大学教旨にどのような歴史性が刻印されているのかを、日本近代史を見渡しながらか論じた。それは、ロング・スパンで早稲田建学の精神のありようを検証してみることが必要だと考えたからである。

早稲田建学の精神として、つねに顧みられるのは、一八八二年一月二日、東京専門学校の開校式で小野梓が行った演説(以下、開校演説)である。この開校演説は、「学問の独立」の意味を明快に論じたものであり、早稲田大学の建学理念にかかわる重要演説である。そこで、今回は、小野がこの演説を行った一八八二年一月時点に焦点を絞って、開校演説の歴史的な構造を探ってみることにしたい。

開校演説の全文は、『早稲田大学百年史』(以下、『百年史』)にも、『小野梓全集』(以下、『全集』)第四巻にも収録さ

れている。しかし、両者には相違がある。

『百年史』は『内外政事情』に掲載された演説筆記の全文を採用しており、「拍手」・「喝采」・「謹聴喝采」・「謹聴謹聴拍手」・「拍手大喝采」といった聴衆の反応が、随所に（ ）括弧で挿入されている。したがって、当日の会場の様子がリアルに伝わってくる点に特徴がある。以下、筆記形式のものを演説筆記と呼ぶことにする。

なお、この『内外政事情』は、小野を中心とする鷗渡会が立憲改進黨の機関紙とすべく発行した新聞で、主幹は山田一郎、監事は市島謙吉である。創刊は、東京専門学校開校の三日前、一〇月一八日である。

これに対して『全集』は、小野が自ら編集・出版した『東洋論叢』第一冊（東洋館書店、一八八五年五月）をそのまま掲載する方針をとっているため、「貨幣の制度を論ず」「論「外交」」「論「郵便」」「輸入減少之原因」「東京専門学校」の五編とあわせて掲載されている。『全集』が小野の生前に刊行された最終版本を底本とすることを原則として編集されたからである。演説筆記ではないため、聴衆の反応は記載されず、「論」文的な性格が強くなっている。以下、「論」文形式のものを演説原稿と呼ぶことにする。

まず、演説原稿に検討を加えてみよう。小野の日記（『全集』第五巻収録）によれば、彼は、一〇月一日・二日・八日・九日・一〇日・十一日・十二日、「外交論」を執筆しており、一三日にはこれを校正して大隈に見てもらい、その後、さらに校正している。そのうえで、一四日、明治会堂で開催された立憲改進黨の演説会でこれを演説し、その翌日、一五日に校正して、一七日に来訪した山田一郎に「外交論之筆記」を渡している（この「外交論」は二〇日・二二日・二四日、「内外政事情」に掲載された）。

「外交論」の執筆に区切りがついたとみられる一四日、小野は「教育論」の執筆に取りかかっている。日記には、二一日の「東京専門学校開校之演説之料」とするためだと記している。開校演説の準備に着手したのである。一五日

は改進黨の月次会であったが、その際、小野は大隈と開校式の件について相談している。そして、一六日、まず、大隈を訪ねて相談（内容は不明）した後、諸事を処理し、帰宅後、「東京専門学校開校之詞」を執筆している。これは佐藤能丸氏が推定する通り（近代日本と早稲田大学）早稲田大学出版部、一九九一年）、開校式当日、校長大隈英磨が朗読するための「開校之詞」の原稿であろう。つづいて一七日・一八日には「教育論」、一九日には「学問論」を執筆したと日記に記しているが、これは、いずれも小野自身の開校演説の準備であろう。当初は「教育論」として構想していたが、一九日時点で「学問論」に変更したといえる。一九日は終日在宅して「学問論」を執筆し、翌二〇日、「学問論」を校正した後、大隈を早稲田の別邸に訪ねて、一緒に開校準備をしている。仕上げた演説原稿（「学問論」）を持参して大隈に示し、その了解・確認を得たものと考えられる。前述の「外交論」の場合と同じ流れである。こうして、大隈・小野は二一日の開校式を迎えた（周知のように、大隈は開校式そのものには出席していない）。

『東洋論策』掲載のものには、前述のように聴衆の状況は記されておらず、用字・用語にも『内外政事情』掲載のものとは、若干の違いが認められる。しかし、基本的に同一原稿である。

『東洋論策』の冒頭には、小野自身による「例言」が掲げられており、そこには、つぎの三点が記されている。

① 自分は好んで時事を論じ、そのたびに必ず筆記するので、次第に原稿がたまってくる。そこで、これを編集して「東洋論策」と題することにした。

② 論策には公にすべきものが多く、まとめてすべてを刊行するのは有効ではない。しかも、世の中のことは、時を追って生じ、自分の論もこれに従って加わっていく。そこで、逐次、刊行し、これを集めてこの篇を大成することにした。

③ 収録した議論は、いずれも時事に関係して論じたものなので、それぞれの冒頭に、当時の事情を略記して、読

者の便宜をはかることにした。

各演説冒頭の小野の説明によれば、「貨幣の制度を論ず」は一八八二年五月一四日（東京・明治会堂）、「論「外交」」は同年一〇月一四日（東京・明治会堂）、「論「郵便」」は同年一二月五日（東京・明治会堂）、「輸入減少之原因」は同年一二月二日の横浜・港座での演説であり、いずれも立憲改進黨員として時事を論じたものである（前三者は立憲改進黨の演説会で小野が担当した演説）。これに対して最後の「東京専門学校」は、後三者とほぼ同時期の演説ではあるが、他とは趣旨が違っている。小野はその冒頭でつぎのように記している。

明治十五年十月廿一日新に東京専門学校を開き其式を行ふ。余其議員たるを以て之に臨み斯演説を為す。当時専門学校の起るや、人々其政党の用に供するを疑ふ。然れども其実は然らず。大隈氏実に我邦の学問を勧むるの微意を以て之を創し、毫も他意を挟まず。而して余の熱心之を賛同するも亦一に我邦学問の独立を謀らんと欲するに在り。故に此機に乗じて之を弁ず。

演説から二年半ほどたった時点で、小野自身が自らの演説原稿を、解題つきで刊行したものと見えよう。

つぎに演説筆記について検討しよう。小野の演説筆記は、東京専門学校の開校式の五日後から、『内外政事情』と『郵便報知新聞』の両紙に、それぞれ連載された。『内外政事情』には、一〇月二六日・二八日・三〇日と十一月一日、四回にわたって「演説筆記」欄に掲載されている。初回の冒頭には、つぎのような説明が掲げられている。

左ノ一篇ハ小野梓君カ本月廿日東京専門学校ノ開校ニ当リ演説セラレタル所ノ筆記ニ係ル蓋シ本篇ハ同校ノ主旨ヲ明ニセラレタルモノ、如ク余輩ト大ニ感ヲ同フスアルヲ以テ本篇ノ終ルヲ俟テ為メニ一言セント欲シ先ツ本篇ヲ茲ニ掲クト云爾

『郵便報知新聞』の「投書」欄にも、「祝東京専門学校開校」と題して、一〇月二六日・二七日・二八日・三〇日の

四回に分けて掲載されたが、これは、投書を掲載するという形をとっており、冒頭には「佐藤齋」名でつぎのように記されている。

左ノ一篇ハ去ル二十一日東京専門学校開校ノ節同校ノ議員小野梓君カ演説サレシ祝詞ノ筆記ニシテ大二世ノ士気ヲ振起スルニ足ルモノアルヲ以テ貴社ニ投ス幸ニ余白ヲ吝ム勿レ

内容・形式は、『内外政事情』掲載のものと同様である。『郵便報知新聞』は福沢諭吉門下の慶應義塾系の人々が発行していた立憲改進黨の機関紙の新聞であり、その中心人物矢野文雄は、東京専門学校の議員でもあった。議員は学校経営の首脳であり、現在で言えば理事にあたる（前掲佐藤能丸『近代日本と早稲田大学』）。発刊早々で部数が少ない『内外政事情』だけでなく、社会的な影響力が格段に大きい同紙を活用して、東京専門学校の存在を広く社会に発信しようとしたのである。

演説の翌二二日、小野は帰宅後、「祝詞」に校正を加えている。この「祝詞」が『内外政事情』と『郵便報知新聞』に掲載された経緯を小野の日記からうかがい知ることができない。しかし、「外交論之筆記」が『内外政事情』に掲載された事情から勘案すると、開校演説についても、終了の翌二二日、小野が筆記に手を入れ、これが二三日か二四日、『内外政事情』の発行を担当している山田なりに渡されて、同紙に二六日から掲載されることになったとの推測がなりたつ。小野は二四日から二六日まで、二泊三日で埼玉県宝珠花村での演説に向向っていて、在京していないからである。

なお、『郵便報知新聞』への投稿者「佐藤齋」がどのような人物なのか、判然とはしない。しかし、『内外政事情』に掲載された筆記と同じであるから、小野から山田に渡されたと想定される筆記と同一のものが、同時に『郵便報知新聞』にも手渡されたと考えられる。

早稲田大学図書館には、一八八二、八三年段階の小野の自筆草稿・浄書稿を綴じた和装本「東洋遺稿」が所蔵されているが、そのなかに「祝東京専門学校之開校」と題した原稿が含まれている。「東洋著作」の用箋を用いた浄書に、小野が自筆で朱字の補正を加えている。内容は『内外政事情』・『郵便報知新聞』のものと同じであり、聴衆の反応記載も同一である。両紙は小野が補正した後の記載を採用している。途中に三カ所、区切りとおぼしき目印が付けられており、この区切りが『内外政事情』の四回分の区切りと一致していることから、これは『内外政事情』掲載のための演説筆記原稿であったと推定される。あるいは、この原稿こそが、演説の翌二二日に校正した当のものかもしれない。冒頭一行目、タイトルの下に記された「小野梓君演説筆記」の文字は抹消されている。

なお、「外交論」の場合、演説翌日の日記に「夜校外交論。課書生」記されており、演説終了後の「外交論」に小野が手を入れ、これを書生に浄書させたのではないかと推定される。とすれば、開校演説についても、演説原稿から演説筆記への手続きに、同様の流れがあったとも考えられる。

### 三 開校演説における「学問の独立」観念

開校演説で、小野は「学問の独立」について、「一国の独立」は「国民の独立」に基礎をおき、「国民の独立」は国民の「精神の独立」に根ざすと論じ、さらに「国民精神の独立」は「学問の独立」によると弁じた。したがって、「国を独立」させるためには、「民を独立」させねばならず、そのためには「精神を独立」させねばならず、そのためには「学問を独立」させねばならない、という流れになる。「独立」が国家・国民・精神・学問という四つのレベルで用いられ、後者が前者を規定するという論理になっていることがわかる。その意味で、当時の小野にとって、「学問



の独立」追求の課題は、「一国の独立」実現の課題と、深く結びついていたといえる。

では、「一国の独立」をめぐって、小野は、当時、どのような現実直面し、何を考えていたのであるか。それをよく示すのが、開校演説の原稿執筆に先立って執筆していた「論外交二」（「外交を論ず」）である。小野はこれを開校式のちようど一週間前の一〇月一四日に明治会堂で演説していた（前述）。その問題観が開校演説の問題観を規定していたと見ることができる。

「論外交二」で小野は、トルコの例を引きながら外交政策の重要性を強調し、トルコの失敗を反面教師として不平等条約の改正をすすめるべきことを主張していた（『全集』第四卷、一七―一八ページ、二五ページ）。そこには、ちようどこの時期、外務卿井上馨のもとで進められていた条約改正交渉に対する批判が含蓄されている。また、小野はこのような西洋に対する外交政策とあわせて、「論外交二」で東洋に対する外交政策にも言及している。日本と清の間の疑念を解き、日本と朝鮮の間の憤怨を散らさなければならぬというのである。演説の三か月ほど前、朝鮮で反政府・反日の暴動、壬午軍乱がおこっていた。これによって、朝鮮をめぐる緊張が高まり、日本国内では、清と戦え、朝鮮を処罰せよという声が高まっていた。このような状況に対して、小野は東洋の大局をあやまつてはならないと主張していた。

開校演説ではつぎのように弁じている（『全集』第四卷、四七ページ）。

今の時に当て紅海以東独立国の体面を全ふし自国の旗章を揚ぐるもの、寥々乎として暁天の星の如し。印度は既に亡びて英国に属し、爪哇は其制を荷蘭に受け、暹羅は其命を英国に聴き、近時安南も亦た疲れて仏蘭西に帰する等、漠々たる亜細亞大陸の広き、能く独立の体面を全ふし自国の旗章を翻すもの、唯我と支那とあるのみ。

これは、「論外交二」の一節とほぼ同文である（『全集』第四卷、二三ページ）。今、アジアで独立の体面を全うしてい

るのは日本と清しかないというのである。

さらに開校演説を小野はつぎのように続ける（『全集』第四卷、四八ページ）。

我邦の如きは、現時条約の改正すべきあり、日・清・韓の關係を正すべきあり、強国土壤を接して我が隙を窺ふあり、富土海城を浮べて我が利を攘まんと欲するものあり。其国勢の切迫する、決して安靜の時に非らざるなり。日本は条約改正や壬午軍亂の処理などの問題をかかえており、また、強国がすきを狙っているから、安心してはいられないと主張しており、これは「論外交」の主題そのものである。こうして、開校演説の前提には「論外交」があり、二つの演説は連続していると見ることができる。

つぎに、「一国の独立」の基礎となる「学問の独立」についてである。島善高氏は、小野が執筆した「施政の要義」の中に、「学問の独立」についての言及があると指摘している（『早稲田大学「教旨」について』『早稲田大学史記要』第四卷、二〇一一年三月）。現在確認できる小野の文書のなかで、「学問の独立」という言葉が登場するのは、この文書が最初である。そこにはつぎのように記されている（『全集』第五卷、九九ページ）。

我邦学問の独立せざるや久し。而して其然る所以のものは教育の基礎未だ立たざるに由る。惟ふに学問の独立は一国独立の根本なり。故に我党は文部の全力を竭くして之を帝国の大学に用ゐ、以て学士をして名誉と実益とを併有するを得しめ、終生身を学科に委し所謂る日本帝国の学問なるものを興起するを得しめんことを期す。

この「施政の要義」は、小野の日記によれば、一八八二年二月二日に起筆し、大隈と相談を重ねながら執筆したうえで、六日に浄書したものである。立憲改進黨の宣言・規約とあわせて（一体のものとして）起草されている。

小野は開校演説のなかで、大隈がかつて、要旨、つぎのように自分に語ったと述べている。

我が国で学問の独立しないことは久しい。いまだに学問が独立しないのは、学者に「名誉と利益」を与えていない

からだ。したがって、政府は森林を選んで皇室の財産とし、皇室はその収益から天下の学者に与え、終生、学問の蘊奥を追究する便宜を得させ、それによって学問を独立させるべきだ。

この大隈の言は、「施政の要義」の中で小野が言及している「学問の独立」のとらえ方と基本的に一致している。すなわち「文部」（政府）の措置として、「学士」（学者）に「名誉と実益」（名誉と利益）を与え、「学問」研究の振興・支援をはかるべきだというのである。したがって、大隈がかつて「学問の独立」について語ったと小野が開校演説で述べているのは、この「施政の要義」執筆の時期、すなわち一八八二年二月初めの時期にあたるとも考えられる。

「施政の要義」では、「学問の独立」は「文部」に要求すべき政党の政策課題として位置づけられている。開校演説でも、大隈が語るような「学問の独立」実現の方法、すなわち皇室を支援して「天下の学者」を「優待」するのは内閣諸君の責任だとしている。したがって、東京専門学校が担うべき「学問の独立」のための課題は、これとは異なることになる。小野は、大隈の「学問の独立」発言を受けつつも、内容的には別途の議論を展開している。すなわち、外国の文書・言語によって我が子弟を教授し、これに依らなければ高尚の学科を教授することができないのは、学者が講義する障礙をなすものであって、学問の独立をはかる所以ではないと主張し、在野の我々が担うべき責任は、この障礙を除いて学者が学問の実体を講ずる便宜をはかることにあるとしている。つまり、邦語教育の推進を東京専門学校の特徴として打ち出し、これによって「学問の独立」に貢献するというプランを提起したのである。

「学問の独立」を「一国の独立」へと媒介するのは、「精神の独立」・「国民の独立」である。では、小野はこれをどのように論じていたのであるうか。一八八二年五月末から六月初めにかけ、小野は立憲改進黨の主義・主張を黨員・支持者に浸透させることを意図して（『全集』第三卷「解題」）、「余が政事上の大主義」を執筆している。これは、小野

の主義と立憲改進黨の主義主張との関連性を示す重要史料であるが、そのなかで小野は、教育によって青年に「活潑有為の氣象」を養うことは、政治家がつとめるべき重要な課題だと主張している。それは、「姑息の輩」が少年・青年たちの「活潑敢為の氣象」を嫌って「人間の精神を死物」と同じにしようとしていることへの批判であった。その際に小野が批判を向けているのは、「宋儒の学問」、つまり儒学であるが、この箇所の論理・論法・語法は、開校演説の一節とほとんど同じである。そして、「余が政事上の大主義」ではつぎのように主張していた（『全集』第三卷、一七一―一七二ページ）。

余は本来帝国の教育未だその基を堅くせず、為めに学問の独立せざるを歎慨するものなれば、今後益々教育の規模を快闊廣大にし、以て我が自主独立の精神を暢達せんことを冀望するや深し。

こうして、「余が政事上の大主義」のなかで、小野は「学問の独立」によって教育の発展・展開をはかり、大いに「自主独立の精神」を養成すべきだと主張していたのである。

以上検討してきたように、一八八二年一〇月の開校演説の「学問の独立」観念は、小野にとって、彼が当面していた政治上・外交上の課題と密接に連動していた。「学問の独立」の基本は人づくりにあり、「活潑有為の氣象」と「自主独立の精神」の養成こそが大切だと彼は考えていたのである。